

**令和6年度 介護保険における生活支援体制整備推進のための研修
報 告**

令和7年2月27日（木）

岩沼市健康福祉部介護福祉課 事業給付係兼高齢者活躍支援係 谷地 宏基

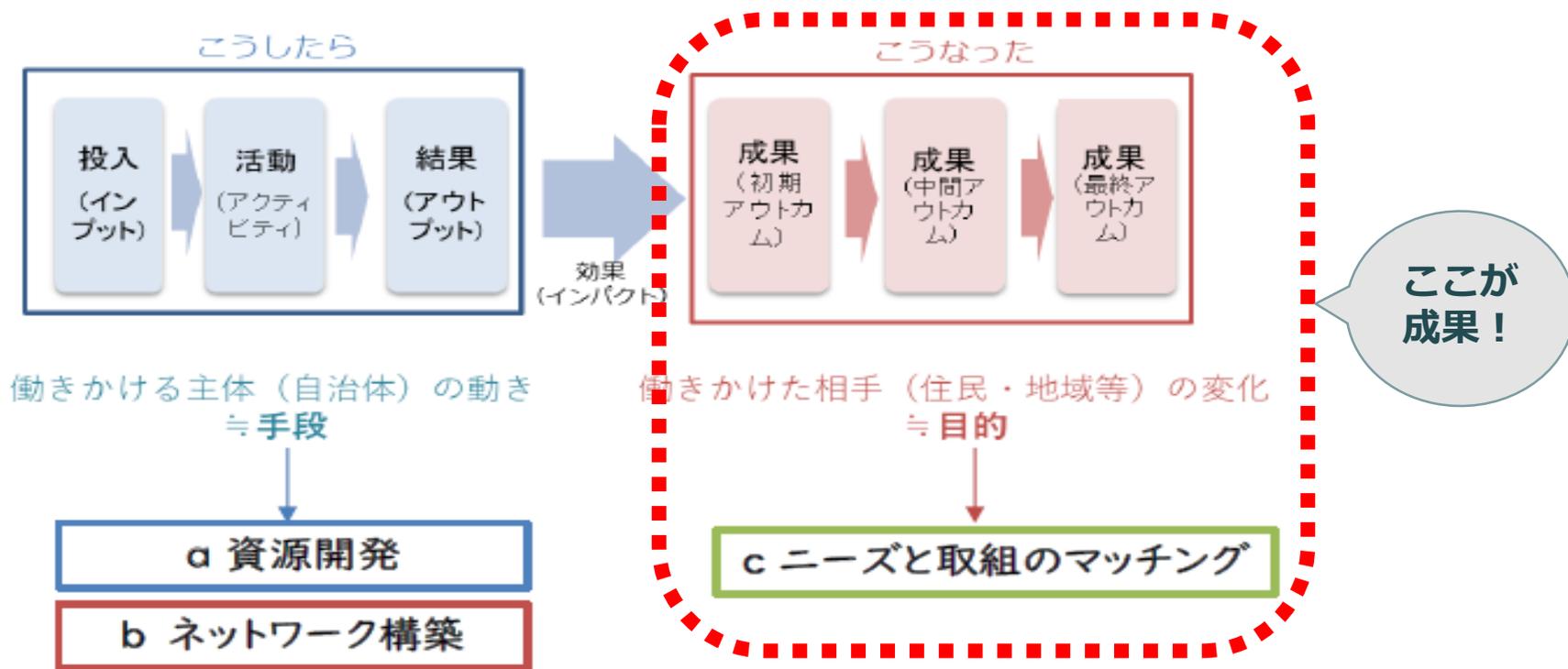
皆さんに共有したいこと

- 1 生活支援コーディネーターの成果
- 2 生活支援コーディネーターのメインターゲット
- 3 地域包括支援センターとの連携とマッチング
- 4 今後やっていきたいこと

1 生活支援コーディネーターの成果

1 生活支援コーディネーターの成果

事業における「結果（アウトプット）」と「成果（アウトカム）」



例えば「協議体の開催回数」「育成したボランティア数」「資源マップに掲載した資源の数」は成果ではなく結果。事業目的ではなく手段を整備したに過ぎない。

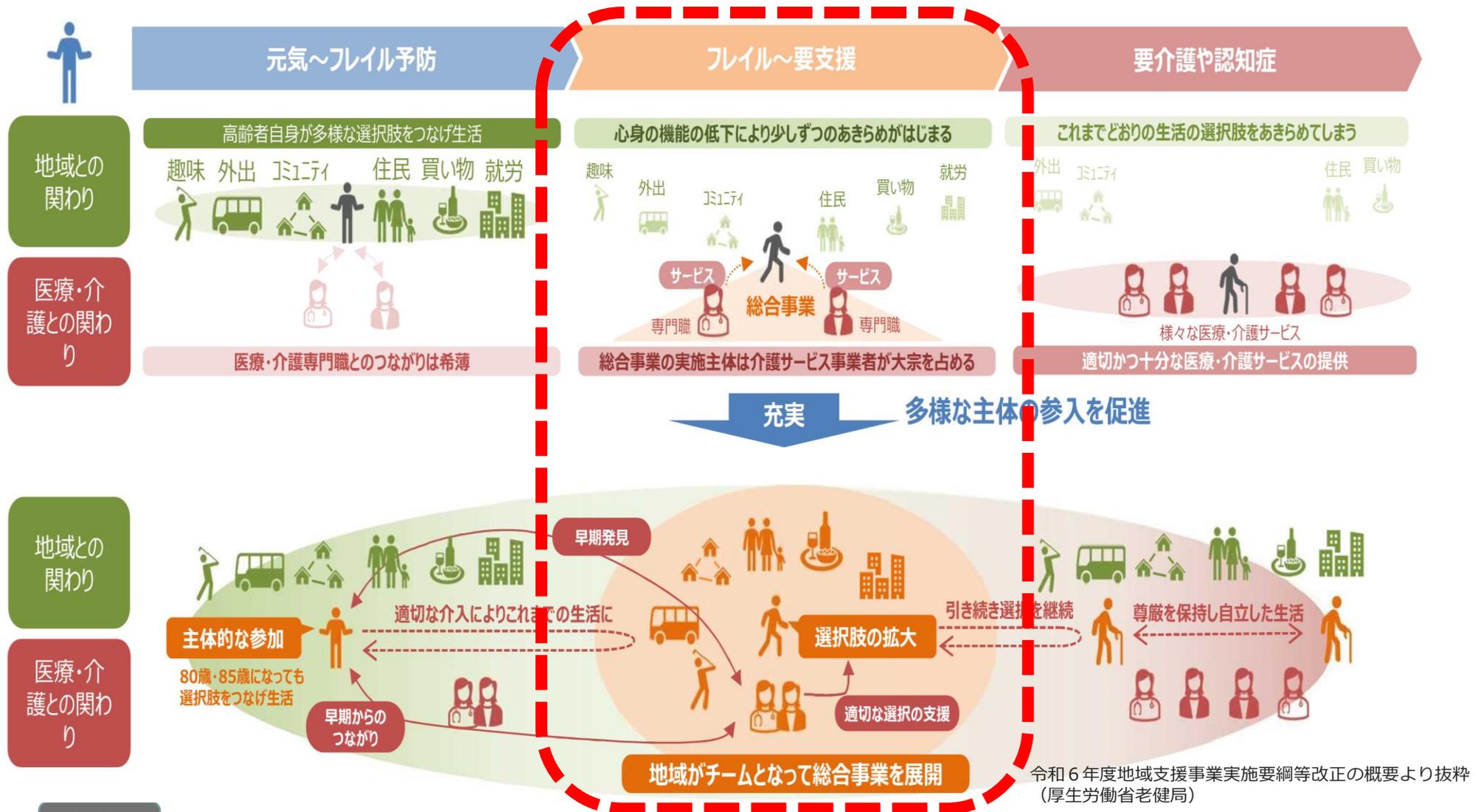
SCが関わった課題の事例数や提供した資源の数が成果では？
対象者(高齢者)に変化があってこそその事業ではないか

SCさんに「これが成果！」と示さなければ、目標が不明確に

ロジックモデル：投入・活動・結果・成果の論理構造図 (W.K.Kellogg Foundation. Logic Model Development Guide, 2003、Rossi, et al. プログラム評価の理論と方法、をもとに作成)

2 生活支援コーディネーターのメンターゲット

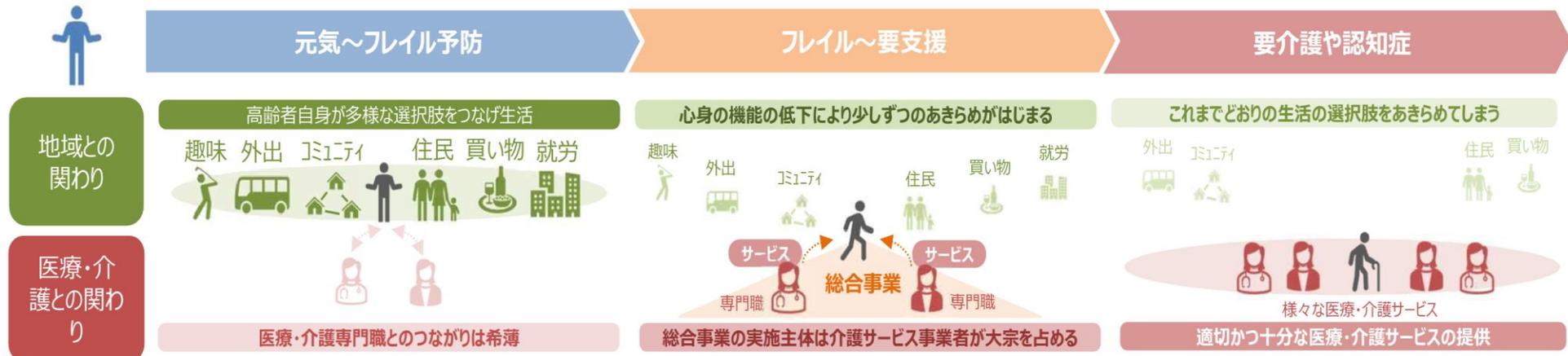
2 生活支援コーディネーターのメインターゲット



結論

「地域がチームとなって総合事業を展開」するために
 元気～フレイル予防の層だけではなく、**フレイル～要支援の層がメインターゲット**となる

2 生活支援コーディネーターのメインターゲット



充実 多様な主体の参入を促進

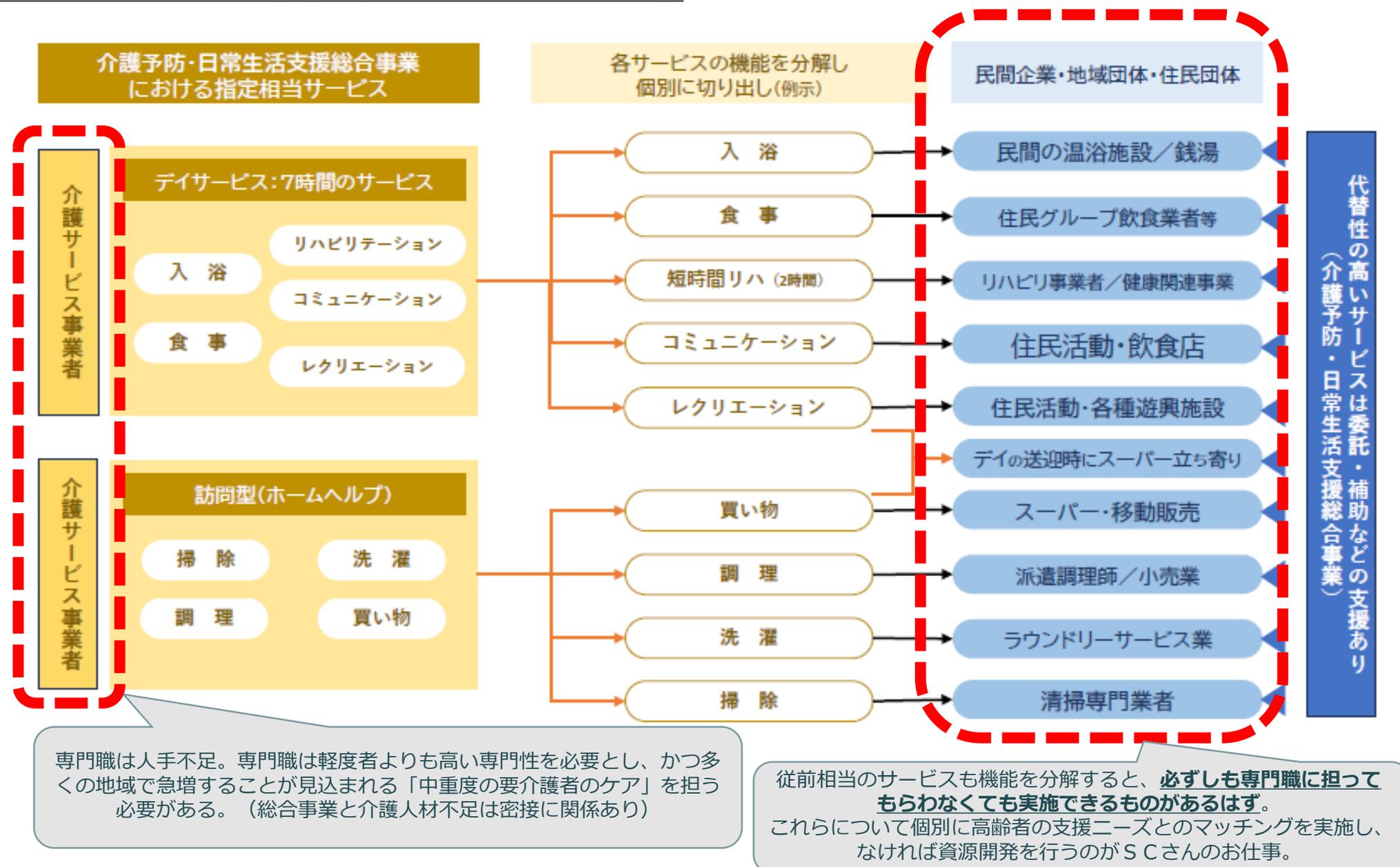


フレイル～要支援の高齢者にとって、必ずしも専門職が実施する従前相当サービスがベストな選択肢とは限らない (想定している従前相当サービスの対象者も、進行性疾患などかなり限定的)

日常生活に支援が必要になっても、必要な部分のみ介入し、自立を支援することが理想

多様な主体による従前相当サービスだけではない支援の選択肢を充実させることがSCさんのお仕事！ (赤点線部分)

2 生活支援コーディネーターのメインターゲット



3 地域包括支援センターとの連携とマッチング

3 地域包括支援センターとの連携とマッチング

なぜ地域包括支援センターと連携をしなければならない？

元気高齢者の情報は元気高齢者が集まる場所にあるが、
フレイル～要支援者の情報は、
元気高齢者が集まる場所（サロン等）だけ行っても
なかなか把握できない



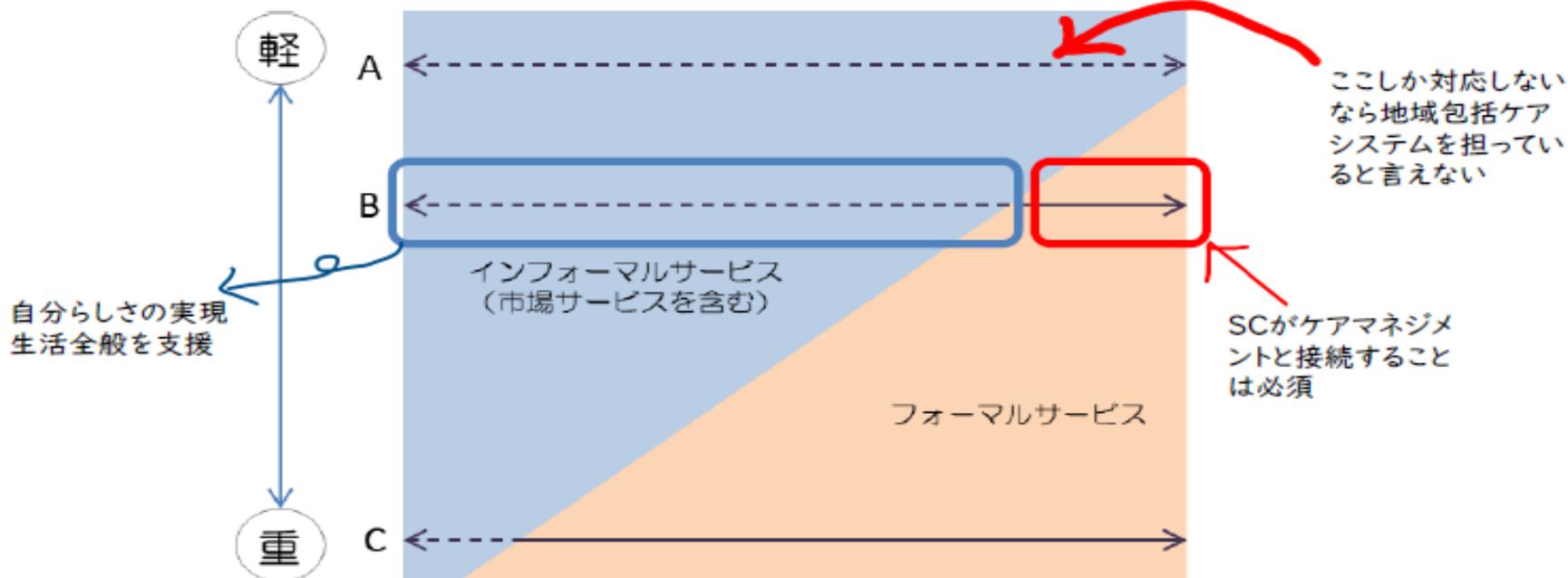
生活支援コーディネーターのメインターゲットである
フレイル～要支援者の支援ニーズを
地域包括支援センターが持っているから

地域包括支援センターが日々の取組の中で感じている支援ニーズをS Cさんが把握しておかなければ、生活支援体制整備事業におけるフレイル～要支援者に対するマッチング支援が上手くいかない

地域包括支援センターの職員さん方も普段から
「これってフレイル～要支援者の支援ニーズかも？」
というアンテナを張っておかなければならない

3 地域包括支援センターとの連携とマッチング

SCとケアマネジメントとの接続は必須



出典：蒲原基道氏（元厚生労働事務次官）講演資料

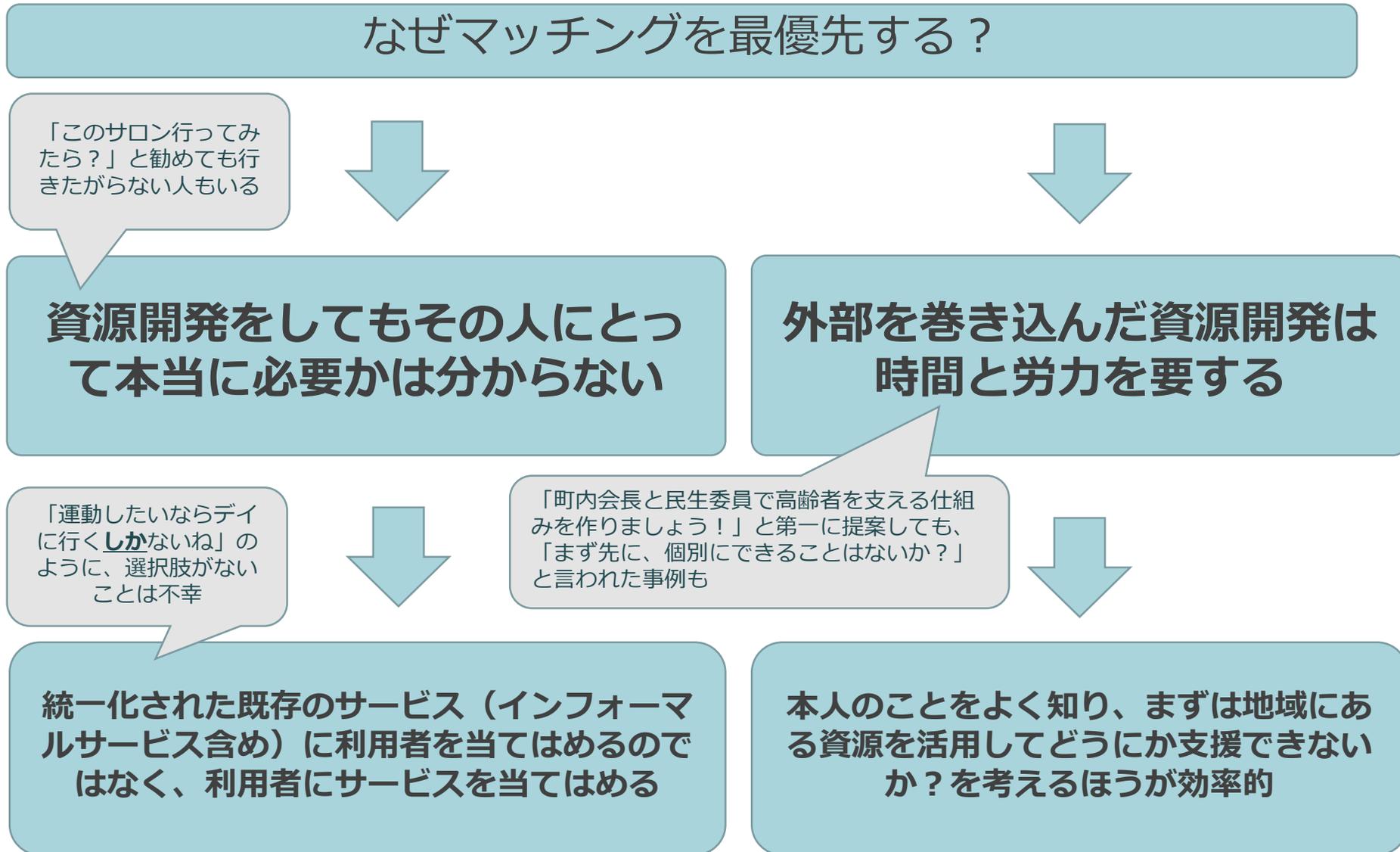
SCの仕事の範囲は元気高齢者だけではない

→「自分らしい暮らしを人生の最後まで」というコンセプトに合わない

支援が必要なBやCに関わるべきで、ケアマネジメントとの接続は必須

→地域包括支援センターの機能強化

3 地域包括支援センターとの連携とマッチング



3 地域包括支援センターとの連携とマッチング

地域資源の種類

してあげる資源	本人の資源
担い手が高齢者向けのサービスとして実施するもの	意味づけすることで資源となる 使用や使用方法の指導が必要
<p>公助・共助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バスタクシー助成制度 ・介護保険 など <p>互助・自助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サロン ・介護予防教室 ・お助け隊 ・地域食堂 ・移動支援活動 ・保険外ヘルパー ・スポーツジム ・何でも屋 ・企業のCSR活動 	<p>場所</p> <p>フードコート、商店先のベンチ 図書館、公園、移動販売車の周囲 手芸品販売店、美容院、喫茶店</p> <p>道具</p> <p>電動アシスト自転車、趣味の道具 便利な園芸用品、デジタル機器</p> <p>環境・役割</p> <p>山、ペットや植木、学校、スポ少、 車の通行量、企業活動、困りごと</p> <p>人・目に見えないもの</p> <p>家族・友人・隣人・友情・責任・ 挑戦心・過去の後悔</p>

社会参加の場は、
サロン・介護予防教室
だけではない

利用者に対するアセスメン
トが浅いと、本当の支援
ニーズにたどり着かず提案
できる資源は見つからない

たくさんの資源を提案し、
**高齢者自身ができること・
やってみたいことを選択す
ることが大事**

・利用しない人にとっては資源ではない
・実施主体がなければ成立しない。
→これだけを「資源」とすると
資源は足りなくなる

アイデア次第でいくらでも見つかる

4 今後やっていきたいこと

4 今後やっていきたいこと

地域包括支援センターへの共有

生活支援コーディネーターだけでは、生活支援体制整備事業の目指す成果をあげることは難しい。地域包括支援センターの職員も、生活支援体制整備事業に関連している意識を持ってもらいたい。

生活支援コーディネーターの目標設定

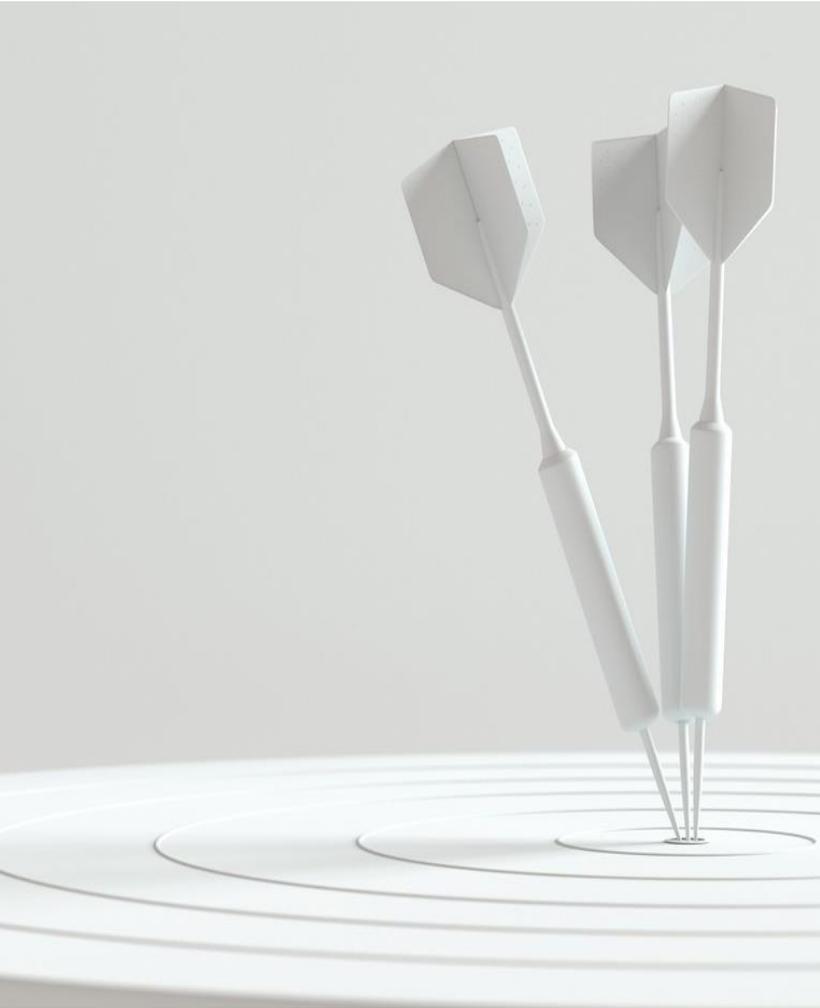
アウトプット指標ではない短期的な目標と、中長期的な目標を設定し、共有する。

SCさんを孤立させない

何をやってもいい事業だからこそ、適宜方向性の確認と共有が大事。相談してもらえる関係性の構築は必須。

地域支援事業実施要綱と介護予防・日常生活支援総合事業ガイドライン改正内容の把握

勉強します・・・



さいごに

生活支援体制整備事業について、恥ずかしながら今更知ることがたくさんある研修でした。

事前課題もあり、3日間で約15時間の研修でしたが、それ相応の収穫があったと思います。

研修を受講させていただいたことにこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。

【参考資料】

総合事業の「フルモデルチェンジ」

(厚生労働省「介護予防・日常生活支援総合事業の充実に向けた検討会における議論の中間整理」令和6年12月7日における表現)

選択肢を増やすための 機能分化による地域との融合

高齢者の視点からみて「選択肢」が増えることが重要なゴール。そのために「総合化されたサービス」である従前相当サービスの機能を分解。その担い手を、一般的な地域市場に解放する方向性。

- 1 提供主体別の類型（A/B）の廃止と支援方式による主体を問わない類型（新A/B）
- 2 「従前相当サービス」＝「総合的なサービス」と定義 ⇔ 「多様なサービス・活動」＝「機能分化したサービス」
- 3 従来より民間企業の参画は志向されてきたが、より強化の方向。より参入しやすい方向に。

地域包括支援センターにおける 「包括的支援化」に向けた方向性

地域包括支援センターの本来の重要な役割は、ケアプランという紙を書くことではない。地域包括支援センターの多くの職員が本来取り組むべきと考える「人と向き合う時間」への評価は、大きな意味を持っている。

- 1 多様なサービス・活動に移行することによる「ケアマネジメントB/C」の活用
- 2 包括における「地域や人と向き合う」業務が評価される形に。
- 3 地域包括支援センターが既存の報酬で、これまで以上の力（≡包括的な支援体制）を発揮するための改革

加速化する「従前相当」から 「多様なサービス・活動」へのシフト

今回の総合事業の改正は、従前相当サービスを減らし、多様なサービスへのシフトを加速化させる意図がみられる。その具体的な特徴として、3つの具体的な施策を改正の中に見出すことができる。

- 1 従前相当サービスの想定対象者の（これまで以上の）限定的定義
- 2 要介護移行時の弾力化対象をA型サービスにも拡大
- 3 「多様なサービス・活動」が増えないとケアプランの任意化が進まない仕掛け

介護予防・日常生活支援総合事業をもう一度考えるためのガイドブック



総合事業を改めて見直すためのガイドブックです。総合事業の評価のあり方についても試案を提示しています。

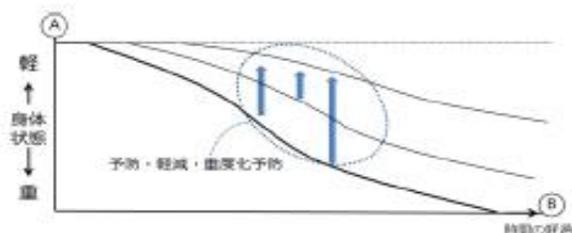
3つのアプローチ	アウトプット	初期アウトカム	中間アウトカム	最終アウトカム
1 ポピュレーション・アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 出前講座・説明会の開催数 ■ 通いの場の数 ■ 体力測定会の開催数 ■ 広報活動の回数 / 等 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 出前講座等に出席した住民の数 ■ 通いの場や参加者の数 / 等 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 社会参加率 ■ 通いの場における75+等参加率 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 調整済み軽度認定率
2 ハイリスク・アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 短期集中予防サービスの開催回数、委託先の数、参加者数 / 等 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 想定対象者に占める実際の参加者数 ■ 参加者の参加前後の状態変化 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 参加者の一定期間後の状態変化 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 初回認定者の平均年齢 ■ 軽度者の在宅継続数または率(在宅生活改善調査)
3 利用者の選択性の幅	<ul style="list-style-type: none"> ■ 選択肢増のための取組実績(協議体開催回数等) ■ 生活支援Coの支援先打ち合わせ回数 / 等 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 従前相当サービス以外のサービス・活動の種類・数 / 等 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 要支援者等ケアプランにおける「従前相当サービス」を含む割合 	



サービス提供主義と本人視点の支援

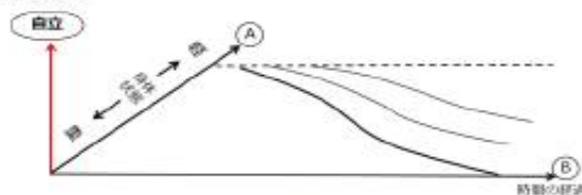
この2つの違いは何か？

■ 住民主体の通いの場：23名（29.1%）



「その人らしさ」とは無関係に
状態に対応する手法
サービス提供主義

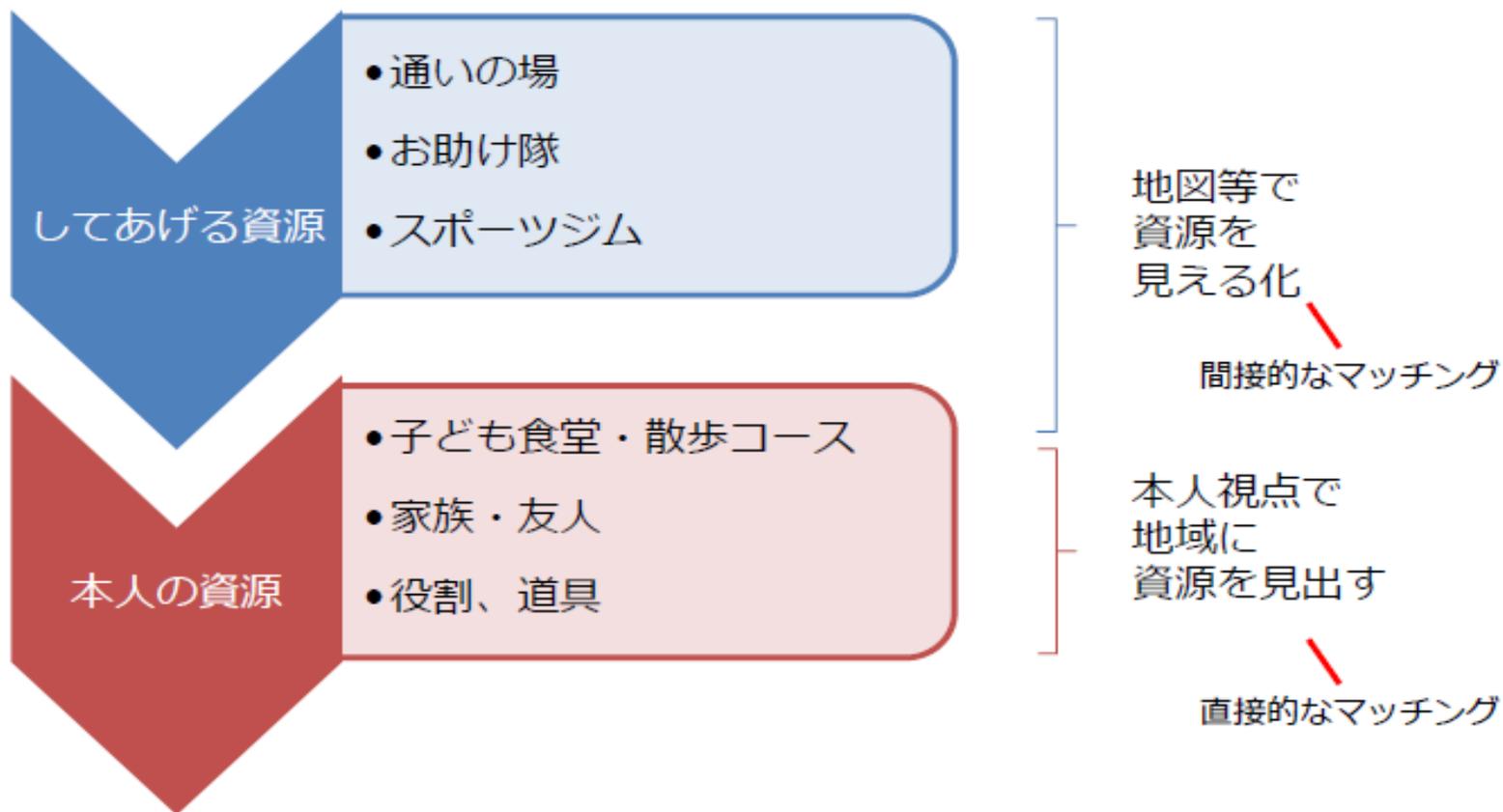
- **家庭内役割の獲得、充実**
犬の散歩、掃除、草取り、畑づくり、剪定、孫と公園で遊ぶ
お孫さんの新築の状況を見守る…
- **趣味活動の再開、発展**
社交ダンス、囲碁、コーラス、船の模型を寄贈、妻と楽器セッション
- **家庭外役割の再開、獲得**
認知症カフェでのボランティア、デイサービスで押し花講師
放課後こども教室



その人がどんな人かを
知ることで対応
本人視点の支援

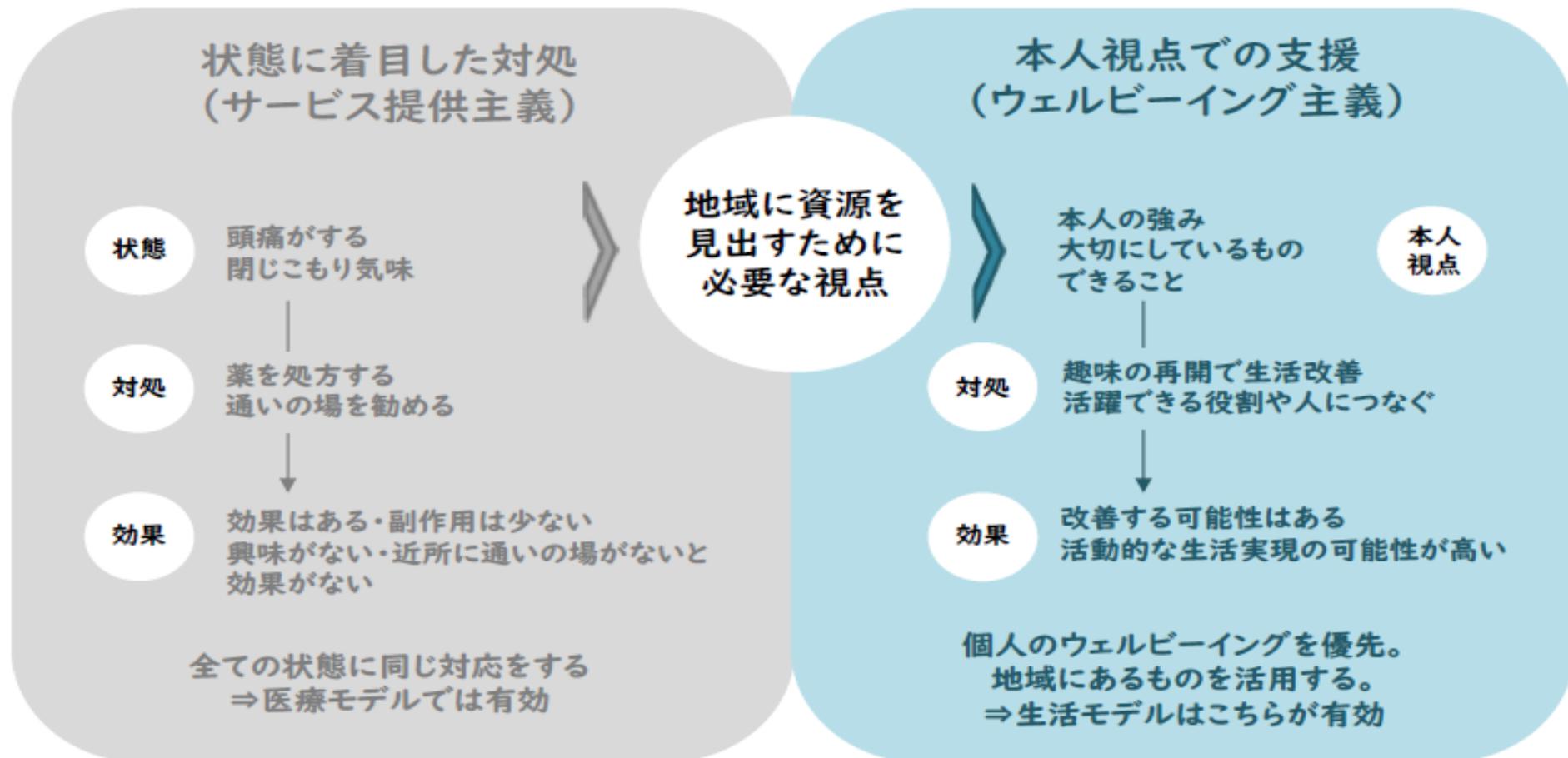
どちらが自立支援？ どちらが効果的な支援？

地域資源のマッチング ふたつの手法



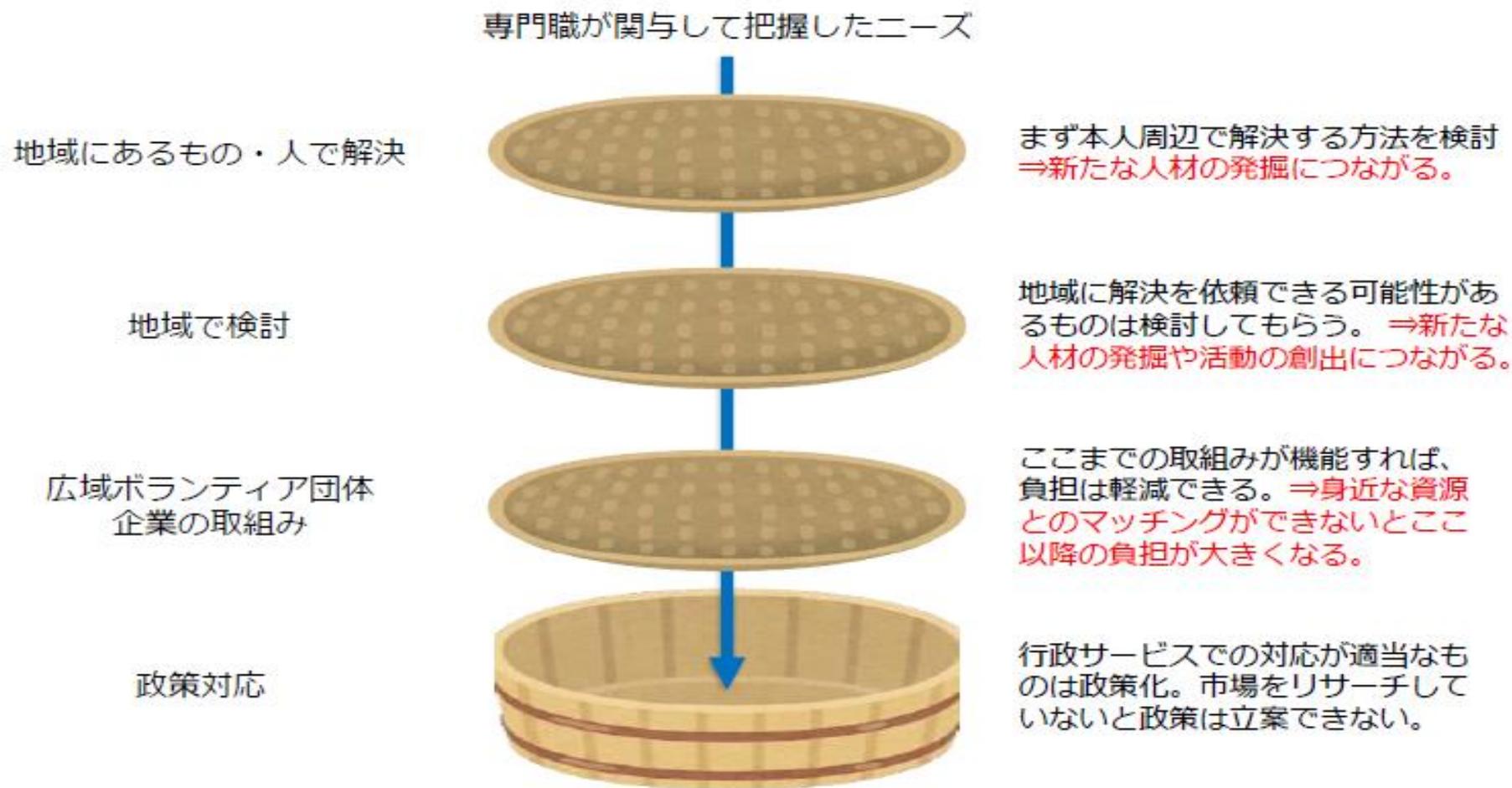
地図・リスト化で見える化した資源を事業所やケアマネ等に提供。
それ以外の資源は本人視点で資源を見出すことでマッチング効率は向上。

状態への対処から本人視点での支援へ



**ケアマネジメントと地域(資源)を接続することにより
対象者のウェルビーイングを実現する活動が生活支援体制整備事業**

マッチングがもたらす効率的なサービス・取組み創出



ニーズを正確に把握し、マッチングによる支援体制がなければ、
より多くの住民や企業を巻き込んでサービスを創出することは難しいのでは？

幸せの定義と自分らしさ



選択肢がないことは不幸なこと



選択肢から選ぶ=幸せ=自分らしさ



より多くの選択肢を支援者が提供できるかどうか

地域包括ケアシステムにおける「生活支援体制整備事業の役割」